

小松市埋蔵文化財調査だより

第7号 1997.3.31

小松市教育委員会 〒923 石川県小松市小馬出町91番地
埋蔵文化財調査室 TEL (0761) 2 2 - 4 1 1 1



や さと むかい やま い せき ごう こ ふん しゅつ ど たん こう 八里向山F遺跡 7号古墳出土の短甲

八里向山F遺跡は、古墳時代中期の後半（西暦470年頃）に築かれた古墳群で、丘陵の尾根筋に並ぶ10基の円墳（円形に溝で区切られた古墳）が発見されました。その中の7号古墳から、棺の跡が二つ見付き、その一方の棺に、鉄製短甲（よろい）が納められていました。短甲は、横長の鉄板を数段積み上げて鉄の鉾で留めた形式のもので、県内でも4例目という貴重なものです（本文挿図参照）。全面に黒漆が塗られ、中には、鉄製の斧・鋤先・鎌・カンナ等の工具類、そして束ねた矢尻が納められていました。短甲の置かれた位置は遺体の足下と考えられ、遺体の両脇にあたる場所には、鉄剣と鉄刀がそえられています。棺は、丸太を半分に割って中をくりぬき、再び合わせて割竹形に仕上げたものです。直径が70cm程、長さは4～5mに及ぶ長大なものであったと考えられます。短甲の出土は、かなり有力な豪族がこの古墳に葬られていたことを示しています。



二つ並んだ棺跡

（手前が短甲出土の棺跡で、右側に剣と刀がある）

平成8年度の埋蔵文化財発掘調査

なが だ みなみ い せき

長田南遺跡の調査

所在地 小松市長田町地内

調査期間 平成8年5月23日～10月22日

調査面積 2,437㎡

原因 地区体育館建設

遺跡の概要 長田南遺跡は、小松市街の北部に位置し、東に梯川の支流の八丁川が流れており、西にはJR北陸線が通っています。

地区体育館建設に伴い発掘調査が行われ、遺跡からは、弥生時代の土器・石器および古代の須恵器が少量認められた他は、主に鎌倉時代の中国製の陶磁器や国産の陶磁器・砥石が出土しています。また、木器では井戸枠に用いられた曲物や板材、その他には曲物の杓・箸状木製品・漆碗や井戸のお祭りに使われたと考えられる呪符木簡が見つっています。

調査の概要 調査は地区体育館建設に伴って行われ、その道路予定部分と体育館予定地の合わせて2か所を行いました。その結果、道路予定部分の中央より東では、八丁川が過去に洪水を繰り返していた様子がうかがえる堆積が見られました。更にその東側では遺構が認められませんでした。道路中央より西側および体育館予定地では井戸跡が6基、掘立柱建物跡は5棟以上、柱跡も多数見つっています。

体育館予定地で見つかった1基の井戸跡は、曲物を井戸枠に用いており、その掘り方（井戸枠を据えるために少し大きめに掘った穴）の南壁中段に掘り込まれた穴がありました。中からは柄が抜



横穴を掘って柄杓を埋めた井戸



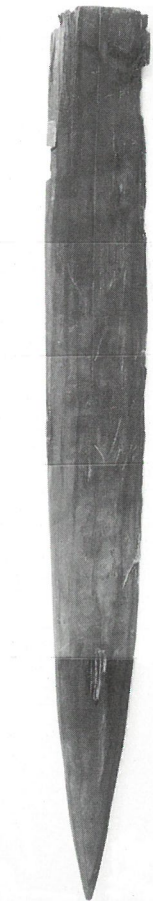
長田南遺跡の調査位置（1/5,000）

かれた柄杓（曲物）とそれの蓋として使用されたと考えられる底板、木製の柄がついた鉄製の錐が出土しました。

また、道路予定部分から見つかった井戸跡では、板材を組み合わせた枠を据えてあり、その掘り方の北壁に接して長さ46.0cm、幅最大5.5cm、厚さ最大0.5cmの呪符木簡が出土しました。上端の左右に切り込みがあり、下端は尖っています。墨書は片面に認められ、上から下まで書かれていました。また、同じ掘り方より箸状木製品も出土していることから、災厄を避ける呪力があるとして、井戸祭祀に使われたものと考えられます。

井戸を造るときに箸状木製品や呪符木簡を立て、祭りを行った後、埋めて井戸として使用したものと思われ、時期は13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられます。

呪符木簡は、天災や病気など害悪を取



呪符木簡

（十八の星また測は
される模様）

鬼 鬼

女

日 日

月 月

鬼

急

々

如

律

令

□

□

「^{どうきう}急急如律令」は、奈良時代に中国から伝わった^{えきがく}道教の流れをくむ^{おんみどう どう}易学、陰陽道の一節で「鬼よ去れ」という意味が考えられています。陰陽師と呼^{おんみよう し}ばれる呪術師がいて、古代から暦により吉凶を占^{れき}い、儀式で用いていたと思われ、平安時代中期以降、貴族の無気力を反映して呪術的側面が強くなり、中世では民間呪術としても盛んになり、いろいろな物事に対して行われていたようです。



道路予定部分の調査状況：手前にあるのが井戸跡

や さと むかい やま い せき ぐん
八里向山遺跡群の調査

調査期間 平成8年4月13日～継続中

原因 住宅団地造成事業（民間）

遺跡の概要 八里向山遺跡群は、小松市の北縁、寺井町との境界をはしる東部丘陵地に位置しています。北の寺井町側丘陵地は、既に泉台住宅団地として開かれており、梯川の支流・鍋谷川に面する丘陵の南側、つまり小松市に含まれる部分がかなりじて自然地形を残していました。鍋谷川によって開けた平野を臨むかたちで多くの尾根が並び、その尾根ごとに集落遺跡や古墳群などが営まれています。

調査対象となった八里向山遺跡群は、平成4年に住宅団地造成に先立つ遺跡の分布調査で発見されました。A～Hの合計8つの遺跡からなり、旧石器時代・縄紋時代・弥生時代の各集落、古墳群や古墳時代後期の窯跡、さらに奈良時代の建物跡、鎌倉時代^{かまあど}の塚など極めて多様な内容で、しかも、



10 号古墳全景



八里向山遺跡群の位置 (1/25,000)

これらは1つの尾根でも重複して存在していることが確認されています。

調査の概要 平成8年度は4年目の調査で、F遺跡とA遺跡の大部分の調査が完了しました。A遺跡では、昨年度のA'遺跡^{こおち せいはいしやうく}で検出した道路状遺構の延長部分と弥生時代末の高地性集落の調査に入りました。

A遺跡のすぐ南側の谷部には、開発工事により現在は姿を消しましたが水源が有り、昨年まで水が絶え間なく流れていました。その周辺から弥生時代末の土器が大量に出土しています（湧水地遺跡：H遺跡）。今年度の調査では、この湧水地を利用してと思われる人々の集落・住居跡が見つかっていました。遺構としては斜面部分に大型の竪穴住居跡が2軒、台地の平坦面に掘立柱建物跡が10棟確認されました。

F遺跡は丘陵の南縁にあたり、鍋谷川を臨む尾根上に位置し、5世紀後半、古墳時代中期の後半に築かれた円墳が10基確認されました。その棺の跡からは副葬品として刀子、劍、刀、斧、鋤先、鏃、矢尻の鉄製品をはじめ、小玉、勾玉、丸玉の



玉製品の出土が確認されています。中でも7号古墳には棺が2つ存在し、その一方から短甲^{たんこう}と呼ばれる鉄製の鎧^{よろい}が出土しました。時期は西暦450年頃と考えられます。

また、10号古墳の上に鎌倉時代、13世紀の後半の石を積み上げて出来た塚が作られていました。一辺が5m、高さが約1.2mの大型のもので、裾を大きな石で四

短甲を着用した武人 角く囲んだ後、中を盛土して、さらにその上に大量の石を円形に積み上げて飾ってありました。県内でも最大規模で、極めて例が少なく、かなりの有力者の墓と考えられます。

古い文献資料には、能美に石清水八幡宮^{いわしみず はちまんぐう}が経営する農地があり、その総責任者の地位を、八里にいたらしい「弥里殿（やさとのの）」が借金で苦し

ぬか み まち い せき

額見町遺跡の調査

所在地 小松市額見町地内

調査期間 平成8年4月22日～継続中

調査面積 5,500㎡

原因 オフィスアルカディア事業

遺跡の概要 額見町遺跡は、月津台地の北西端・柴山潟を眼下に臨む見晴らしのよい台地上に位置します。飛鳥時代から平安時代末期まで営まれた約250,000㎡の範囲に広がる大規模な集落遺跡です。中心的な時代は飛鳥時代と奈良時代で、7世紀初頭から8世紀後半までです。この時代は律令時代に位置付けられ、越前国の江沼郡（手取川流域より南側の地域）に属し、額田郷が存在していました。額見の名は江戸時代以降見られますが、その名は額田の地名より変更したもので、中世には依然、額田荘として額田の名が継承されています。

発掘調査は、遺跡総面積の15%にあたる38,000㎡を対象としており、今年度はその内5,500㎡の調査を行いました。

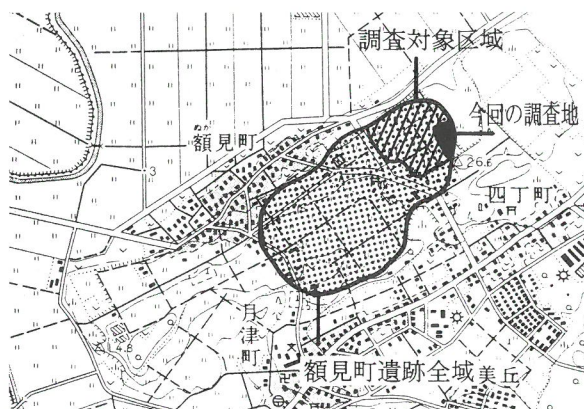
調査の概要 今年度は、昨年度、遺跡上層の近世の畝溝や建物跡の調査を行った範囲に重複しており、その範囲について、さらに掘り下げ、飛鳥時



古墳の上に築かれた塚

む前任者から買い上げたことが記されています。これが西暦1270年の出来事で、この塚から出土した土器とほぼ同時代と思われます。後に「弥里介（やさとのすけ）」とも名乗っており、国府にいた役人クラスの豪族でもあったと考えられます。

尚、中に納められていたと思われる骨壺は、既に荒らされており、破片と思われるものが出土しています。

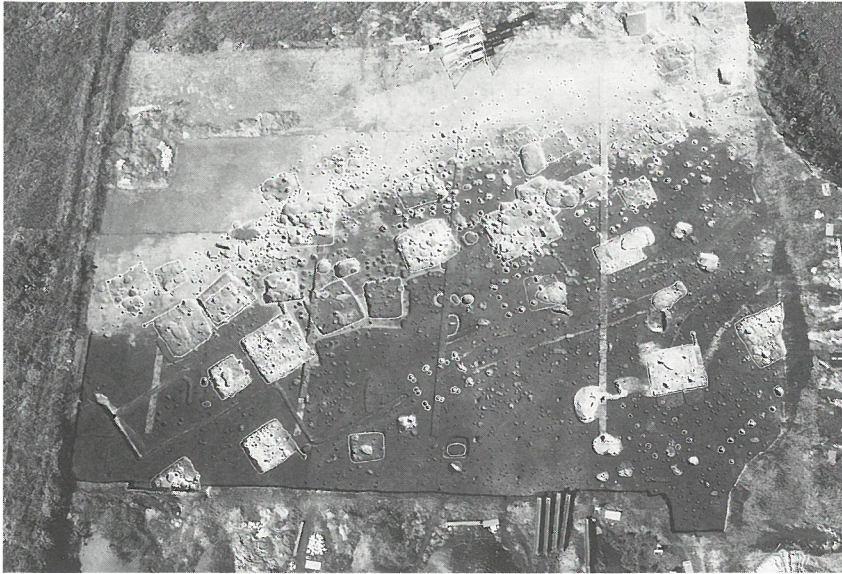


額見町遺跡の位置（1/25,000）

代から始まり奈良時代までを最盛期とする集落跡の調査をしました。

その結果、竪穴住居跡を33軒、掘立柱建物跡25～30棟、土器を廃棄したと思われる大型の土坑^{どこう}を6基確認しました。竪穴住居跡はほとんどが7世紀代のもので、その前半の7軒については〈小松の重要遺跡・遺物⑦〉で解説してあるオンドル状遺構^{いこう}が検出されています。この7世紀前半は、額見の地に初めて集落が形成された時期に当たり、初代の人達の住居でのみ、この構造をもつカマドが見つかりました。

オンドル状遺構は暖房施設を兼ね備えたカマドと考えられます。その類似した事例が朝鮮半島で



額見町遺跡の調査区域全景

確認されており、渡来人の存在がうかがえます。また、当遺跡からは当時の土器である須恵器や土師器の他に、鉄製品や鉄生産を行っていた痕跡を示す遺物が多数見ついています。これらから高度な技術を持った渡来人が集落内に存在していたと想像することができます。

よし たけ い せき 吉竹遺跡の調査

所在地 小松市吉竹町地内

調査期間 平成8年4月2日～継続中

調査面積 7,678㎡

原因 土地区画整理事業

遺跡の概要 吉竹遺跡は、木場潟の北東方向に位置し、現在おもに田んぼとなっている低湿地の部分と、その低湿地に臨み現在畑や荒地となっている台地の部分とからなっています。

台地の部分には、弥生時代後期から古墳時代の集落の跡があり、たてあなじゅうきよあと 竪穴住居跡や ほったてはしらたてもあと 掘立柱建物跡など



今年度の調査で見つかった竪穴住居跡

7世紀後半の竪穴住居跡は18軒以上見つっていますが、いずれにもオンドル状のカマドは見られません。これは日本の気候が、朝鮮半島の寒冷な気候に比べて温暖であったため、当初、暖房機能を兼ね備えたカマドを作ったが、世代交替とともに日本の気候にあった暖房機能を持たない通常の構造のカマドに切り替えたものと思われます。

額見町遺跡からは、土器の他にも7世紀前半の遺物として県内最古の鉄製紡錘車や耳環（金銅製耳飾り）が出土しています。

また、8世紀後半に位置付けられるものとして陶製分銅、陶製紡錘車、円面硯、鳥形須恵器などがあります。このように一部の遺物は律令祭祀に伴うものと思われ、立地条件や遺跡規模からも額田郷家関連遺跡としての内容を持った遺跡と言えます。



吉竹遺跡の位置 (1/25,000)

が見ついています。

低湿地の部分では、住居の跡などは、ほとんど見つかりませんが、現在の地面の高さから深さ約80cm～1mの所に土器などの遺物を含んだ地層があり、弥生時代後期から室町時代の遺物が出土しています。

調査の概要 今年度は昨年度からの継続で、台地の部分で5,168㎡、低湿地の部分で2,510㎡の調査を行いました。

台地の部分では、竪穴住居跡が今年度の調査で7棟見ついています。左の写真は、そのうちの2棟が少し重なった状態で見つかったもので、当



布掘り掘立柱建物跡

遺跡で見つかった他の竪穴住居跡とくらべて、ひとまわり大きく、何か特別な意味をもつ住居が建っていたものと思われます。また住居を支える柱の穴の数が、当遺跡で見つかった他の住居跡は4本ですが、写真手前側の住居跡だけは7本ありました。写真手前側の住居跡は弥生時代後期のもので、後方のものは古墳時代の初め頃のものですが。

竪穴住居跡のほかに、掘立柱建物という、地面に穴を掘って、その穴の所に柱を建てる建物の跡が、今年度の調査で約15棟見つっています。上

よう か いち じ かた い せき

八日市地方遺跡の調査

所在地 小松市日の出町地内

調査期間 平成8年4月2日～継続中

調査面積 10,000㎡

原因 土地区画整理事業

遺跡の概要 八日市地方遺跡は、JR小松駅を中心とする市街地の東側に位置し、約78,000㎡の範囲に広がる弥生時代中期の集落跡です。遺跡は、小松平野のほぼ中心部に位置し、梯川と旧今江潟、木場潟に挟まれた概ね海拔5m以下の低地に存在します。「地方」の名が示す通り、ここは江戸時

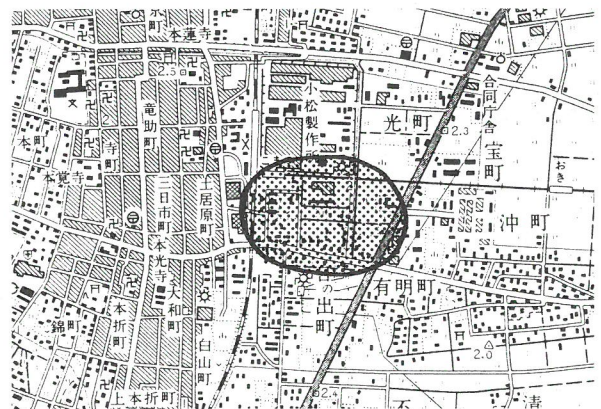


河川跡より出土した木製の匙

の写真は、少し変わった掘立柱建物の跡で、平行する2本の溝の中に柱の穴を配するものが一棟見つかりました。これを「布掘り掘立柱建物跡」といいます。写真のものは弥生時代後期のもので、ちょうど人が立っているところに柱が建ち、当時は倉として使われていたものと思われます。

この他、古墳時代中頃の土器が大量に埋まっていた、直径1～2mほどの土坑という穴が5基見つっています。たまにほぼ完全な形で出土する土器もありますが、ほとんどの土器が破片となって出土しています。おそらく、使い終わった土器を捨てた穴と思われます。

今年度分の調査を終え、現在、台地の部分の北側約半分が調査されました。しかし、北側から南側にむかって調査していくにつれ、しだいに土器などの遺物の出土する量が多くなり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかるようになってきています。おそらく、この集落跡の中心は台地の南側に位置するものと思われます。とくに来年度はこの台地の南側を調査する予定であり、さらなる調査成果が挙げられるものと期待されます。



八日市地方遺跡の位置（1/25,000）

代、八日市町の商人らの資本により開墾され、近年まで水田や蓮田として利用されてきた土地です。

昭和5年、当地の地主が水田から2個の石器を採集したことが発端となって遺跡の存在が確認されました。以後、昭和25年と同36年に小規模な調査が行われています。この時発見された土器には櫛描紋と呼ばれる弥生時代中期に盛んに用いられた紋様が描かれており、「小松式土器」と名付けられています。

小松駅東土地区画整理事業に伴い、平成4年に遺跡範囲を確認する分布調査、引き続き平成5年より発掘調査が行われており、現在も継続中です。

調査の概要 今年度は、昨年確認された遺跡中央を東西方向に流れていたと思われる河川跡をはじめ、事業計画の実施に伴って合わせて8地区の調査を行っています。

その結果、河川の岸部分（南側）には石屑や木屑を捨てた穴が幾つか見つかりました。当遺跡では、首飾りにしたと思われる碧玉製の管玉や木製の農具・容器などが出土しています。中には写真のような、とても精巧で優美な作りの匙がありました。また、それらと共に多くの製作途中のものがみつかり、石屑や木屑はこれらの製作に伴って出るゴミと思われ、遺跡内で管玉や木製品が製作されていたことが推測されます。

その他にも大小様々な穴がたくさんありました。それらは井戸枠を持つ井戸や柱穴・杭穴、もしくは土器や石を埋めたものでした。今後、記録整理が進むにつれて、住居や倉庫のような建物跡も見つかり、集落の様子をうかがい知ることが出来ることと思われま。

更に、遺跡の東側、つまり集落の東側に隣接して周溝墓（周囲を円形や方形の溝で区切った墓）

が見つかりました。周溝墓は、以前は住居地だった所の上にも築かれています。幅が10mを超える大きなものが幾つかあり、その周りに3～5mほどの小さなものが存在しています。

これは集落が河川の氾濫等により埋まったり、または集落を別の場所に移した跡地に墓を築いたものと思われ、これまでの調査で河川の南側については東側から順に墓域に取り込まれてきたことが分かっています。



今年度調査した周溝墓

平成8年度 埋蔵文化財調査事業一覧

発掘調査	遺跡名	所在地	調査期間	原因	時代	面積㎡
	長田南遺跡	長田町	5月23日～10月22日	地区体育館建設（市）	鎌倉	2,437㎡
	八里向山遺跡群	上八里町他	4月15日～継続中	住宅団地造成事業（民）	弥生、古墳、鎌倉	13,000㎡
	額見町遺跡	額見町	4月22日～継続中	オフィスアルカディア事業（市）	奈良～平安	5,500㎡
	吉竹遺跡	吉竹町	4月2日～継続中	土地区画整理事業（民）	弥生～古墳	7,678㎡
	八日市地方遺跡	日の出町	4月2日～継続中	土地区画整理事業（市）	弥生	10,000㎡
分布調査	開発行為名称	所在地	開発面積	調査日	備考	
	宅地分譲事業（民）	符津町	1,936.33㎡	5月10日	埋蔵文化財は確認されず	
	福祉施設建設事業（民）	安宅町	6,677㎡	6月29日	埋蔵文化財は確認されず	
	土地取引（民）	犬丸町	2,241㎡	8月10日	埋蔵文化財は確認されず	
	移動電話通信事業（民）	高堂町	約240㎡	9月7日	埋蔵文化財は確認されず	
	工場建設事業（民）	日用町	8,900㎡	12月17日	事業実施の際、立会調査を行う	
	店舗新築工事事業（民）	埴田町	484.70㎡	12月20日	埋蔵文化財は確認されず	
	店舗建設事業（民）	河田町	456.72㎡	1月13, 14日	埋蔵文化財は確認されず	
	分譲宅地開発事業（民）	木場町	4,943.16㎡	2月5, 6日	遺跡の存在を確認、発掘調査実施予定	
	集会所建設事業（民）	戸津町	520.98㎡	2月24～26日	調査範囲内での工事実施を了承。事業範囲拡張の場合は立会調査を行う	
	店舗建設事業（民）	井口町	730.73㎡	3月12日	埋蔵文化財は確認されず	
	地区体育館建設事業（市）	長谷町	3,080㎡	9月21日	埋蔵文化財は確認されず	
	土砂採取事業（民）	三谷町	1,200㎡	5月8日	遺跡範囲を保存し、工事実施を了承	
	土砂採取事業（民）	戸津町	1,355㎡	3月10～19日	遺跡の存在を確認、発掘調査が必要であることを報告	

（市）は市営事業、（民）は民間事業を示す。

小松の重要遺跡・遺物⑦

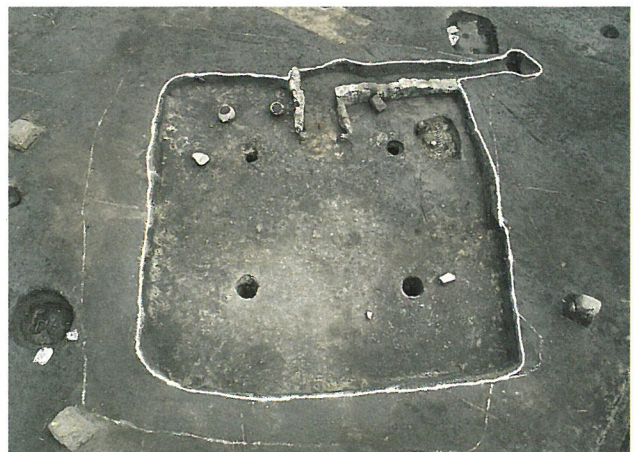


ぬか み まち い せき じょう い こう ごう たて あな じゅう きょ あと
 額見町遺跡のオンドル状遺構をもつ13号竪穴住居跡

現在の額見の地名は、江戸時代以降の額見村からのもので、それ以前は額田ぬかたと言われていたようです。名称由来は「ぬかるんだ田」とも言われますが古代江沼郡の額田郷ぬかたごうに由来する考えが有力です。額見町遺跡は、額田郷とされる地域で最も北に位置しますが、南へ広がる動橋周辺の平野部を一望できる台地に立地し、西方は古代北陸道を眼下に見渡す地域の要にあります。つまり、額田郷の中心となる村落であったと考えており、郷長の家や役所もここに営まれていた可能性があります。

発掘調査は、先の紹介のとおり、始まったばかりですが、既に飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居跡と竪柱建物跡たてばしらたてものあとが多数発見されており、当時の村の様子が徐々に解り始めています。住居の多くを占める竪穴住居跡は、四角く掘った穴を住居の床とするもので、中に4本柱を立て、その上に屋根を組んで作られます。古代の竪穴住居には今の炊事場にあたるカマドが粘土で作られています。写真にあります13号竪穴住居跡ではオンドル状遺構いこうと言われる「L」字型煙道えんどうをもつカマドが作られていました。このカマドは東日本ではほとんど発見例がなく、全国でも数少ないカマドで、煙道が住居の壁沿いを通るため、ペチカのような暖房を兼ね備えたカマドとする説があります。韓国には「温突」と言う暖房機能をもったカマドが現在でも使われていますが、その原型ではないかとわれ、韓国の竪穴住居跡でも確認されています。

今年度の発掘調査では7軒の竪穴住居跡でオンドル状遺構が発見されました。当時、技術者として朝鮮半島から多くの人達が移住してきており、この住居もそのような人達が作ったと予想しています。オンドル状遺構は当地に村が営まれた初代の人達の住居では確認されますが、二代目の人達の住居では通常のカマドに代わっており、渡来人達とらいじんの生活様式が徐々に日本化してゆく様子がうかがえます。



13号竪穴住居跡の全景写真